

野鳥たより

—北海道—

第 3 1 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和53年3月21日



オグロシギ

ウトナイ沼にて

1976年8月28日

撮影 小山政弘

羅白の野鳥

——ラウス温泉周辺の4年間の記録——

広野孝男

私は1973年5月から現在まで羅白町のラウス温泉地区に住んでいる。4年余となるが、この間の鳥の記録を整理したので報告する。といっても、鳥の観察を始めてから日が浅く特に熱心に観察をしたわけではないので不十分なものであるがこの地区の記録が少ないようなので、敢えて報告するものである。

1. 期間

1973年5月～1977年8月（4年4カ月）

この間、年間を平均的、継続的に観察したのではなく、春の渡来期の記録が多く、夏から秋、冬にかけては観察回数が少ないものである。

2. 観察地域及び方法

居住しているラウス温泉周辺が中心であるが、羅白岳硫黄山方面の記録や、知床岬、峰浜などの町内の他地区の記録も加えている。海上の記録も一部載せてあるが観察回数が少なく、能力不足で特に不十分なものである。

観察は、早朝や昼休みなどを利用したり、山、沢を歩く時、鳥に目を向けるようにしたもので、特に調査を目的に行ったものではない。

3. 地域の概況

ラウス温泉は羅白町の市街から約3kmラウス川沿いに国道をさかのぼった所で、国道沿いに旅館が3軒、さけますのふ化場、官庁の出先機関等がある。温泉一帯は元河原で、川沿いにはハンノキ、ヤナギ類が多く、草原はほとんどない。現在、斜里側へ抜ける車道（横断道路）の工事中で、工事用車両の通行などで騒々しくなってきた。

羅白町全体を見ると、位置的には知床半島の東側半分であり、山が海岸までせまり平坦部が極端に少なくなっている。このため、人家は海岸部に集中している。

山は天然林が大部分を占め、ミズナラ、ダケカンバの大径木も多い。針葉樹林はあまり発達していない。ハイマツは標高500mあるいはそれ以下から現われ、広く分布している。海岸は砂浜が少なく、干潟もない。広い草

原は岬にみられるだけである。

気象状況は、多雨、冬は雪で、風も強いが、冬期-20℃を越えることは稀である。氷も接岸し続けることなく開水面がみられる。

4. これまでの記録から

この期間の私の記録した鳥は32科109種である。以下特徴的と思われた点について列記してみる。

(1) 知床半島は北海道の東北端に位置することから渡りの重要なルートと考えられる。

・冬期、特に流水のある2月～3月に多くのオジロワシ、オオワシが集結する。100羽以上数えられることも珍らしくない。

・春、4月下旬には上空を通過するオオハクチョウが毎年見られる。（秋期は見られなかった）

知床半島見取図



- ・ヤツガシラ、シラガホオジロ、シマアオジが現われた。これは渡りの途中、寄ったと思われる。
- (2) シマフクロウが生息すること。
- 松法地区で76年に繁殖し(ヒナを確認)、知西別川、ルサ川でも見られた。他の川でも生息の可能性がある。
- (3) ギンザンマシコが夏期、稜線のハイマツ帯でみられ

- 繁殖の可能性がある。
- (4) 少数のハクセキレイが海岸部で、少数のセグロセキレイがラウス温泉で越冬している。
- (5) 知床横断道路の工事により、クマゲラが73年9月以降見られなくなった。

鳥類リスト及び出現期間

- (1) 出現期間は各月を上、中、下旬に区分して示した。
- (2) 実線は記録されたもの、点線は予想されることを示す。観察回数が3回以下の種は○印で示した。
- (3) 備考欄中、場所を記していないものはラウス温泉周辺である。

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ミズナギドリ	ハソソミズナギドリ										海上
ウミウ	ウミウ	海岸
ガンカモ	オオハクチョウ				○									上空通過
	オシドリ									
	マガモ			○				○						
	コガモ					
	キンクロハジロ					○								
	シノリガモ					海岸	
	コオリガモ					海岸	
	ホオジロガモ					海岸	
ウミアイサ						ラウス川	
カワアイサ							
ワシタカ	トビ											海岸 2~3月多い 少ない
	オジロワシ		○	○						
	オオワシ									
	ノスリ							○	○		○			
クマタカ								○	○	○				
ライチョウ	エゾライチョウ								○	○			少ない	
シギ	タカブシギ					○								峰浜 松法 75.1.3
	イソシギ					○								
	ヤマシギ										
	オオジシギ										
	アオシギ	○												
カモメ	ユリカモメ									海岸
	オオセグロカモメ						海岸
	ワシカモメ						海岸
	シロカモメ						海岸
ミツユビカモメ						海岸	
ウミスズメ	ウミガラス	○												海岸
	ケイマフリ	○										
ハト	キジバト									
	アオバト							○	○					
ホトトギス	カッコウ										
	ツツドリ										
フクロウ	シマフクロウ						松法 知西川(76.8)ルサ川(74.12) 76.3一例のみ
	フクロウ			○										
アマツバメ	ハリオアマツバメ					○				春苺古丹
	アマツバメ								
カワセミ	ヤマセミ						ラウス川、その他の川 74.5一例のみ
	カワセミ					○								

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考			
ヤツガシラ	ヤツガシラ								○					75.8.7~13			
キツツキ	ヤマゲラ												73.7岬 73.9知床峠途中 少ない			
	クマゲラ								○	○							
	アカゲラ															
	オオアカゲラ															
コゲラ																
ヒバリ	ヒバリ															峰浜
ツバメ	イワツバメ															
セキレイ	キセキレイ															海岸部で小数越冬 少ない 小数越冬 山に多い
	ハクセキレイ															
	セグロセキレイ															
	ビンズイ																
タヒバリ						○											
モズ	モズ					○	○	○						少ない			
カワガラス	カワガラス												各川に多い			
ミソサザイ	ミソサザイ															
イワヒバリ	カヤクグリ															ハイマツ帯
ヒタキ	コマドリ															岬、ハイマツ帯 73.7 観音岩 岬 知床峠途中 知床峠途中73.7
	ノゴマ																
	コルリ																
	ルリビタキ																
	ノビタキ																
	イソヒヨドリ								○								
	マミジロ								○								
	トラツグミ																
	アカハラ																
	ヤブサメ								○	○							
	ウグイス																
	エゾセンニュウ								○	○							
	コヨシキリ								○								
	メボソムシクイ								○								
	エゾムシクイ																
	センダイムシクイ																
キクイタダキ									○								
キビタキ																	
オオルリ																	
サメビタキ								○									
エゾビタキ									○	○							
コサメビタキ								○		○							
エナガ	エナガ															
シジュウカラ	ハシブトガラ												コガラが混じっていると思われる			
	ヒガラ															
	シジュウカラ															
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ															
キバシリ	キバシリ						○							73.5.27一例のみ			
ホオジロ	シラガホオジロ					○								76.4.20一例のみ			
	ホオジロ																
	カシラダカ					○	○						○				
	シマアオジ								○								
	アオジ																
クロジ																	
アトリ	カワラヒワ													少ない			
	マヒワ																

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
アトリ	ベニヒワ		○											76.2 100羽前後の群 ハイマツ帯
	ハギマシコ					—								
	ギンザンマシコ						—							
	ベニマシコ						—							
	ウシメ						○ ○							
ハタオリドリ	ニューナイスズメ						—						冬季は少ない	
	スズメ						—							
ムクドリ	コムクドリ					○							73.5 峰浜(ラウス温泉では未確認)	
	ムクドリ						—							
カラス	カケス													少ない ハイマツ帯 極めて多い 海岸 知床峠
	ホシガラス						—							
	ハシボソガラス													
	ハシブトガラス													
	ワタリガラス													

その他の記録

羅臼町における記録として、私の記録の他に、アビ、オオハム、ミミカイツブリ、クロガモ、ハシブトウミガラス、ウミバト、マダラウミスズメ、ウミスズメ、コムミスズメ(以上 75年1月3日柳沢紀夫氏)、メジロ(76年8月27日 百武充氏 知床岬)などがある。

参考文献

- (1) 根室自然保護教育研究会49集録 1975
- (2) 知床半島 北海道教育委員会 1967
- (3) 知床半島 北海道 1963

山田良造

ハイタカのヒナ
51. 7. 17
鷹栖町



旭川のワシタカ類 (上)

旭川市内に、近文という地名がある。アイヌ語でチカプニ(鳥、来る、所)と言う。近文山の川に臨んだ山面に大きな岩があり、いつもタカが来て止まっていたのでこの名が付き、音訳して「つかぶみ(近文)」と言う地名が生まれたと言う。又「郷土の地名と伝説」によると今の近文から嵐山にかけて、大きな鳥がいつも大空に輪をかけて舞っていた。それでいつかこの地名をチカップニと呼ぶようになったという。チカップ又はチカッポは「大きな鳥」、ニは「住んでいる所」又は巢の意味で、岩村通俊郷が近文の漢字を当て、別に意識して鷹栖と言う地名ができたと言われている。

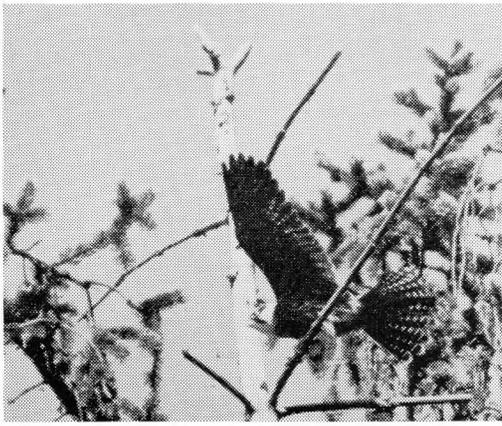
旭川に住んで11年、なるほどと思うことがある。嵐山

から近文山にかけては冬になると、オジロワシやクマタカが渡ってくる。市内の公園等ではチゴハヤブサ、ハイタカ、トビが営巣、ヒナを育て、郊外の鷹栖ではオオタカが繁殖した。自然破壊が進んで少なくなったこの鳥たちが、昔から生息し、種の保存を続けていたことを思うと、人間都市を宣言した旭川市民として改めて認識し、人間と同居できるように保護すべきと思う。

これまでに記録したワシタカ類を、私のメモ帳から紹介する。

1. チゴハヤブサ (ハヤブサ科)

小型のハヤブサで、旭川地方の初認は4月下旬。カラマツやストロブマツ、トウヒ等にかけたハシボソガラ



チゴハヤブサのヒナ

巣立ちしてから羽ばたき訓練

スの古巣に営巣する。このためハシボソガラスの縄張と競合する時があり、激しい空中戦を見ることがある。昭和52年は市内の春光園等6カ所で営巣が確認された。5月中旬に見晴らしのよいトウヒの樹上で交尾が行われ、7月下旬、真っ白な産毛に包まれたヒナが孵化した。♀が付近の樹上で見張りをし、♂が餌を運んで来ると、これを受け取って巣に運ぶ。餌はアカモズ、ムクドリ等小鳥類で、細かく引きちぎってヒナに与える。これは最初のころで、ヒナが大きくなるとそのまま与える。8月中旬、巣立ちのころになると、赤トンボが空を無数に飛び、餌はほとんどトンボになる。餌を運んで来た時は、ヒナたちは早くも察し、キイキイ啼きながら餌をねだっていた。感心したのは、与えられた餌を他のヒナが横取りするようなことは一度もなかったことだ。ヒナの成長は早く、まだらに残る産毛をくちばしを使って抜き、日一日とたくましくなった。ヒナは羽ばたきを常に繰り返し時には巣から枝にたどろしく飛び移り、飛び立つ訓練を重ねていた。数日後、ヒナは20m先のトウヒの木に巣立ちしていた。危なかしい状態で止まり、それから10日余りも親から餌をもらっていた。成長の早いヒナは、危なかしげな遊飛行をしてトウヒの樹上に戻ってきた。この繰り返しは8月の終わりまで続き、ヒナたちは行動範囲を広げ、無事に巣立ちしていった。



チゴハヤブサ

会計からのお知らせ

◆ 会費は郵便振替で、お願いします。会費は同封の郵便振替用紙により納入してください。年会費は、個人1000円、団体3000円。郵便振替口座番号は、小樽 18287です。

● 次の方々から、御寄付をいただきました。誌上より厚くお礼申し上げますとともに、会の運営のため有効に使用させていただきます。

社団法人北海道猟友会様	5,900円
同 札幌支部様	7,000円
木田重雄様	400円
佐々木あや子様	2,200円

沿いに南下するハヤブサを記録した。時期から見て繁殖説があるも、営巣は確認されていない。

3. シロハヤブサ (ハヤブサ科)

昭和50年1月24日午前11時ころ、嵐山で作業中の北邦野草園職員の上野善行、鈴木政直両氏が、ハルニレの老木に止まっている白に斑紋のある中型のタカを発見し、管理事務所に引き返して図鑑を開き、シロハヤブサとわかったという。昭和51年1月に田島邦生氏、3月4日に鈴木政直氏がそれぞれ嵐山で、小鳥を狙っているシロハヤブサを記録している。

嵐山は天塩川一オサラッペ川一石狩川を結ぶ接点があり、また広葉自然林が残っていて野鳥の生息が多く、渡り鳥のコースに当たると考えられており、シロハヤブサは小鳥を狙って立ち寄ったと思われる。

4. チョウゲンボウ (ハヤブサ科)

中型のハヤブサ。少数旭川で記録の情報はあったが、昭和52年1月9日、♀が1羽、神楽岡公園上川神社境内で発見されている。ハシボソガラスに追まわされて餌も取れず、飛ぶ力もなく弱っていた。人が近寄っても逃げようとせず、柴田直臣氏が保護し手厚く手当てしたが、翌日死亡した。

野鳥分布調査の 実施に当たって

——調査の手引きとイギリスの実践例——

(企画・編集幹事会)

はじめに

前号(野鳥だより30号)に掲載された「野鳥分布図のまとめ」は、すでにご覧いただいたことと思います。動植物の分布をこの種のメッシュ図にして表示したのは、恐らく北海道ではこれが初めての試みでしょう。全道に広く会員をもつ本会ならではの事業と評価できる反面、おおよその分布傾向はつかめるとはいえ、残念ながら未調査区域(メッシュ)も未記録区域も共に空白として表わされているという不完全さは避けられませんでした。

完全なメッシュ図を完成させるには、時間はかかってもすべての区域の記録を集める以外にありません。企画、編集幹事会で話しあった結果、空白の区画を埋めるべくこの事業をさらに推進させる必要があるという結論に達しました。問題なのはその方法です。昨年度採用した往復ハガキによって回答をうる方法は、比較的簡便であると同時に集計しやすいという利点はあるものの、情報量が限定される上、任意の地域を何カ所も記録しようとする場合に難点が伴います。そこで様々な検討を経て、最終的に欧米で広く用いられているチェックリスト方式を採用することで決定をみました。新しい方法とは言っても正確な記録を得やすくするため、記入上のルールを明確に示した以外は、昨年のやり方と基本的には変わるところはありません。以下その概略を示し、分布調査の一層の充実を期したいと考えています。その前に、この種の分布図作りを古くから実践しているイギリスの例を紹介して今後の

調査のご参考にしたいと思います。

イギリスの分布調査

イギリスには地域、対象、目的別に数多くの鳥関係の団体があります。そのうち最大規模を誇るのが、1890年創立のRSPB(英国鳥類保護協会)で、実に30万人の会員を擁しています。一方いくつかある全国規模の団体のうち、BTO(英国鳥類協会、会員5,000人)は、バードウォッチング(探鳥)に飽き足らない全英のアマチュアが糾合して全国的な調査網を作り、その協同のもとで標識およびセンサス調査、営巣記録、保護地の調査等、日本流に考えれば環境庁などの行政が行なうべき諸事業を活発に推進しています。

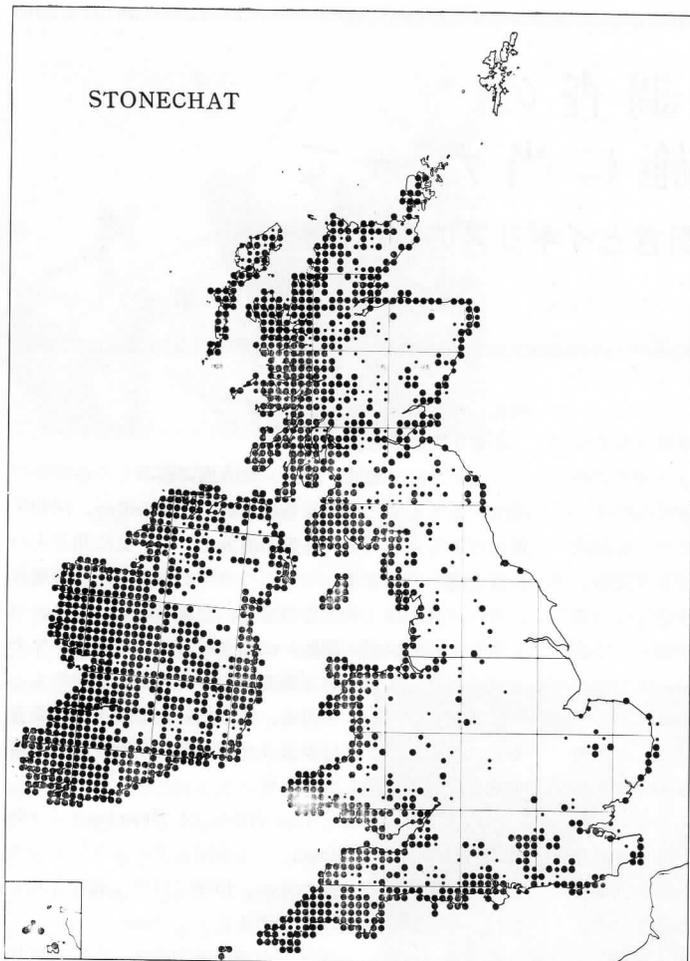
このBTOから「The Atlas of Breeding Birds in Britain and Ireland」(英国とアイルランドの鳥類分布図)という1冊の本が、1976年11月に刊行されました。この本の特徴を列記すると

☆イギリスとアイルランドを10km四方のメッシュに区切り(全部で3,862区画)、繁殖が確認されているかその可能性の大きい208種について、1968年から1992年まで

チェックリストの例 →

BTOのField List of British Birdsの第1ページめを示している。これは約1/4に縮小してあり、原寸はおおよそ15×20cmあります

	DATE WIND WEATHER ROUTE	10 km. O.S. SQUARE		1	2	3	4	5	6	7	8
1			Black-throated Diver								
			Great Northern Diver								
			Red-throated Diver								
			Great Crested Grebe								
			Red-necked Grebe								
			Slavonian Grebe								
			Black-necked Grebe								
			Little Grebe								
			Leach's Petrel								
			Storm Petrel								
			Manx Shearwater								
			Great Shearwater								
			Cory's Shearwater								
			Sooty Shearwater								
			Fulmar								
			Gannet								
			Cormorant								
			Shag								
			Heron								
			Purple Heron								
			Little Egret								
			Night Heron								
			Little Bittern								
			Bittern								
			Spoonbill								
			Mallard								
			Teal								
			Garganey								
			Gadwall								
			Wigeon								
			Pintail								
			Shoveler								
			Red-crested Pochard								
			Scaup								
			Tufted Duck								
			Pochard								



繁殖図の例（ノビタキ）

丸印の大きさが、繁殖の可能性を示している。大きいものから順に「確認」「可能性大」「可能性あり」となっている。この種については、全区画3,862の内、2,015に記録があり、図のように整理された。

の5年間にわたって調査したもの。

☆BTOとIWC（アイルランド野鳥保護協会）の会員10,000名が従事し、編者であるシャーロック博士をはじめ、100名以上の地域責任者が集計、整理に当たった。
 ☆集まった100万以上の記録を整理して、「繁殖の確認されたもの」「可能性の大きいもの」「可能性のあるもの」の段階に区分して、1種につき1枚の地図上に図示した。

その一例としてノビタキの分布地図を掲載したが、このように分布地と非分布地が一目でわかる訳で、メッシュ法の特長がもっともよく生かされていると言えます。この分布地図作成の生のデータになったのがチェックリストです。

ここに1例としてあげたチェックリストには種名が縦欄に羅列してあり、横欄には8回分の記録がとれるよう

に余白があります。別の頁には月日、天候、区画番号などを記載する欄が設けられています。いつでもどこでも手軽に持ち運べて、すぐに記入できるようにとの配慮から、多くはポケットに入る位のサイズに統一されています。

分布調査の手法など

本会が実施しようとしている分布調査は、基本的には前述のイギリスにおけるのと同様な手法を旨としていると言って差しつかえありません。さし当たってはどの程度の種類数をリストアップしてチェックリストにするかが問題になります。できるだけ多くの種数を盛り込めればよいのですが、あまり多いとかえって煩雑になるため、記録される度合の高い種をリストアップし、それ以外を記録した場合には、あらかじめ設けてある余白欄に記入する方法をとることにしました。

次にできるだけ多くの人が手軽に使用しやすいように調査をする上での条件は極力つけないようにしました。ただし、すでに触れたように、調査の信頼度を高めるために不確かな鳥は決して記録しないことと、同一場所で2回以上、できれば数回の調査をくりかえすようにするの二点は留意していただくこととし、その他の注意事項と共にチェックリスト

に印刷することになりました。

この方法だと、どこかへ旅行に出かけた折りなどでも随意に記録をとることができます。会員外の方で協力してくれそうな方がいたらぜひ紹介してください。

われわれ自身の手と足で作った分布図が完成するまで数年を要するかも知れません。組織力、動員力などすべての面で、イギリスの分布図作りには到底及ばないのは確かですが、その一里塚たりえる事業と言えるでしょう。会員の皆様のご協力をお願いします。

集計体制については、現在検討中で、32号には載せる予定ですが、本誌発送にあわせて出来あがったチェックリストを同封しましたので、とりあえずこれによって春の野鳥チェックをそれぞれ進めていただければ幸いです。リストを早急にご入用の方は企画編集幹事会にご連絡くだされば折返しお送りします。

野幌探鳥会

柳沢信雄



快晴と高温に恵まれた絶好の探鳥日和でした。参加者15名と少人数でしたが、遠く帯広から平沼裕氏の参加があり、井上元則副会長がお孫さん裕司君(小4)と、また初参加の岩間英子さん(山口信子さんの紹介)を迎えて、鳥情報の交換もあり楽しく和やかな探鳥会となりました。

鳥のほうは、楽しみにしていた冬鳥が、最終の桂コースでやっとツグミが1羽だけ、それにカラ達の大きな群に出会わないこともあって幾分物足りなく感じました。

しかし、落葉樹に姿をみせたキクイタダキ、人間を恐れないトビの幼鳥等ゆっくり観察できた種もありました。

それに汗ばんだ肌に心よい風をうけながら、やや盛りを過ぎたとはいえ、眼のさめるような紅葉をそここみにみて歩けたのも野幌コースならではの楽しい探鳥会でした。

〔とき〕 52年10月23日(日) 9:00~14:00 快晴

〔担当幹事〕 野口正男・柳沢信雄

〔記録された鳥〕 ヒヨドリ スズメ シジュウカラ ハシブトガラス キジバト シメ カワラヒワ トビ コゲラ ハシブトガラ ゴジュウカラ キクイタダキ アオジ アカゲラ ヤマガラ ノスリ カケス イカル ハイタカ キンクロハジロ ヨシガモ ツグミ メジロ ヤマゲラ オオアカゲラ(合計25種)

〔参加者〕 森拓人・やよい 早瀬広司・富 山口信子 岩間英子 中島洋子 井上元則 井上裕靖 平沼裕 野口正男 柳沢信雄 千代子 ほかに2名(順不同)

ウトナイ湖 探鳥会

梅木賢俊

湖畔に着いてまもなく、湖心部に遊泳しているオオハクチョウ、マガモなどの群にマガン4羽が見られた。ややしばらく観察を続けたが、オジロワシの攻撃を受けたのであろうか、湖面からオオハクチョウやカモ類が一斉に飛び立った。

このときマガン4羽とオオハクチョウ13羽は、上空高く舞い上がり、ひとしきり水面上空を飛翔したあと再度舞い降りるかに見えたが、そのまま高空へと舞い上がり視界から遠ざかってしまった。

この間、10分少々であったが、飛び去った方向は、ほぼ南のようであった(25倍のスコープで追跡)。

いずれにせよ、この時期にウトナイ湖でマガンを見られたのは幸運ではないかと思われる。

探鳥のあと、早い昼食をとり12時すぎにひとまず散会したが、湖畔のヤチハンノキの林でベニヒワの50羽ほどの群が見られた。

〔とき〕 52年11月20日(日) 10:00~12:15

〔担当幹事〕 梅木賢俊・松岡茂

〔観察された鳥〕 ハマシギ12 トビ±20 マガン4 シジュウカラ コガモ±80 マガモ ヒドリガモ カワアイサ チュウヒ アオサギ8 ツルシギ ハクセキレイ2 ハシボソガラス オジロワシ1 カルガモ オナガガモ ホオジロガモ ミコアイサ スズガモ キンクロハジロ セグロセキレイ1 ダイゼン ミサゴ1 カワラヒワ オオハクチョウ ベニヒワ+50 (合計26種)

〔参加者〕 森拓人・やよい 羽田恭子 山口信子 吉

野鳥だより30号でお知らせしたソデグロヅルは、その後、52年12月5日午前中までは木古内町建川の水田地帯に滞在していました。

ところが12月6日以降は同地及びその周辺からは確認されていません。また、姿が見られなくなってから2カ月以上を経過していますが、現在のところ新聞あるいは野鳥関係誌等にソデグロヅルに関する新情報等が掲載された事実はないようです。

これほどの鳥が国内に滞在しているとすれば、なんらかの形で発見されてもよいはずでしょうから、既に大陸方面にでも渡り去って、日本には滞在していないのではないかと考えられます。

ソデグロヅル

梅木賢俊

いずれにしても、国内のどこかでへい死していたなどといったようなことがないことを願ってやみません。

(52・2・23記)

昭和53年度総会について

昭和53年度の総会を次のように開催します。多数の出席をお願いいたします。

◇とき 昭和53年4月15日(土)午後2時～4時半

◇ところ 札幌市中央区北1条西7丁目
北海道婦人文化会館

- ◇議題 1 昭和52年度事業報告及び会計報告
2 昭和53年度予算案及び事業計画案
3 役員選出
4 その他

岡ヨウ 吉岡宏樹 萩千賀 鷺田善幸 佐藤辰夫 早瀬
広司・富 松岡茂・千代子 梅木賢俊 三木昇 小野寺
敬子 新宮康生(順不同)

〔とき〕 52年12月11日(日)10:30~12:00

〔担当幹事〕 亀尾紋十郎・梅木賢俊

〔観察された鳥〕 ウミガラス ウミスズメ ケイマ
フリ コオリガモ ホオジロガモ シノリガモ スズガ
モ ハジロカイツブリ オオセグロカモメ セグロカモ
メ カモメ ミツユビカモメ ウミネコ ユリカモメ
シロカモメ ヒメウ ウミウ ハクセキレイ ハシボン
ガラス ハシブトガラス ドバト(合計21種)

〔参加者〕 林田光祐 井上元則 井上裕靖 三木昇
深村康雄 谷ロー芳・登志 小野寺敬子 山口信子 野
々村菊 早瀬広司 藤原直人 武田忠義 鎌田雅恵 岡
田智己 吉岡義明・ヨウ 伊藤紀行 津田新平 添田潤
助 梅木賢俊・允子・翼 島本虎三 吉田五市 柳沢信
雄・千代子 野口正男 羽田恭子 亀尾紋十郎 富樫敏
雄 松山佳則 早川昇 竹内喜代治 佐々木勇 渡辺俊
夫 中野高明 高橋明子(順不同)

小樽港探鳥会

三 木 昇

「すべらないように気をつけてください。」との声に
迎えられて手を取られながら船に乗りこみました。それ
ぞれに陣取ったところで船は出航。そして間もなく、船
のあちこちからの「あれは、何だ。」という声のたびに
船が移動していきます。

遠くに浮ぶカモめがけて、ゲーッと船を近づけていく
と、コオリガモのオス。「僕、初めて見たよ。」との歓
声です。時を移さず、反対の方に船をまわすと今度はウ
ミスズメ。この鳥は、もぐったかと思うととんでもない
ところからひょこっと顔を出して、我々を驚かせたりし
ます。そのほかケイマフリのように、ゆっくりとその姿
を見せてくれるものや、反対によりやくはっきりと姿を
みせてくれたかと思うと、すぐ飛んでいってしまうカイ
ツブリの仲間など、さまざまでした。そのなかでも船を
きらって防波堤から飛びたったカモメ達が、頭の上を飛
びかうのは特に印象的な光景でした。

舵の達者な船長さんに操られ、港内の鳥をもとめて縦
横無尽。いつもは鳥に出会うまで歩きまわったり、そっ
と近づいて観察するのですが、きょうばかりはスピーデ
ィに鳥達に接近し、いつもと少しばかりおもむきを異に
した探鳥会となりました。ちょっと、あわただしかった
けれども21種の鳥を観察することができました。

アトラクションに船長が魚を用意してくれたのです
が、思うようにカモメ達が集まってくれなかったのは残
念でした。船長さんの好意を一言書き添えておきます。
また、お昼からは、小樽の会員による映写会が催され、
張碓のアオバトなどの楽しい作品が上映されました。会
は3時ごろ散会となりました。

野幌探鳥会

梅 木 賢 俊

集合場所である大麻駅の待合室は、大勢の人で混雑し
ていたが、残念なことにはほとんどが札幌へ向う人たち
であった。参加人数は10人であり、まさに少数精鋭?と
いうところであろうか。

快晴・無風、そして雪質は上々であった。道立図書館
前から林縁に沿って探鳥を開始し、中央口からエゾユズ
リハコース、大沢コースを経由して大沢園地でお昼をむ
かえた。途中ではユキウサギやキツネの足跡、糞があち
こちで見られた。

また天候に恵まれたので、ハシブトガラとシジュウカ
ラの囀りを聞くことができた。昼食後の探鳥では、桂コ
ースでクマガラの声が聞かれたが、季節は確実に進んで
いることを知らされた探鳥会でもあった。特に珍しい

鳥が見られた訳でもないが、壮快な一日であった。

〔とき〕 53年2月19日(日) 9:30~14:30 快晴

〔担当幹事〕 柳沢信雄・村野紀雄

〔記録された鳥〕 キバシリ ハシブトガラ カケス
アカゲラ ツグミ ヒヨドリ ノスリ シジュウカラ
コゲラ オオアカゲラ エナガ ゴジュウカラ ウソ
クマガラ ベニヒワ (合計15種)

〔参加者〕 早瀬広司・富 清野久子 吉岡義明 藤
沢伸也 村野紀雄・森・原 梅木賢俊 柳沢信雄

藤の沢探鳥会

小堀焯治

暖い冬も2月に入り相つぐ白魔のしゅう来できびしい冬になりました。この日も札幌地方は前夜からの大雪で交通もマヒ状態でしたが藤野地区は例外的に快晴でした。この雪が災いしたのか札幌からの出足は鈍く、例年より参加者は少かったようです。常連の顔も少く、淋しい感じでしたが、小樽からの参加者3人、新しい顔ぶれ

も加わりそれなりに楽しい探鳥会になりました。

今年の藤野は秋口からベニヒワが多く100羽近い集団が草の実に群れる光景も見られましたがだんだん分散し、今頃では人家近くの空地等にもよく見かけます。レンジャクも早い時期に姿を見せました。例年になくヒレンジャクの数が多いようです。コウライキジも夏から秋にかけてかなりの数を見ましたが冬に入り姿を見せなくなりました。ハンターのせいでしょう。ツグミも多くハチジョウツグミやマミチャジナイもかなり混じっているようです。冬鳥の数は多いのですがなかなか餌台に寄りつかずこの日もヒヨドリ、ケラ、カラ類が中心で特に珍らしいものは見られませんでした。常連には少々もの足りないようでしたが、初めての人達は結構楽しそうで、目の前で脂身をつつくヤマゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラに感嘆の声を上げていました。昼食時には参加者の自己紹介があり、愛護会からは探鳥会のスケジュールが報告されました。また藤の沢小学校からはコムドリのパンディングの報告等もあり屋内探鳥会に花を添えました。

藤の沢探鳥会も恒例化し多少マンネリ化の傾向はありますが、普段野外での探鳥会にはあまり参加しない人達や子供も気軽に集まるのがこの探鳥会の特色で、小沢さ



つぎのとおり探鳥会を開催しますので、多数の参加をお願いします。知り合いの方、また会員でない方の参加も歓迎しますので、お誘い合わせの上、ご参加ください。

〈野幌探鳥会〉

- ◇とき 昭和53年4月23日(日)
- ◇集合 国鉄バス「北海道女子短大前」停留所に午前8時までに集合
- ◇とき 昭和53年5月14日(日)
- ◇集合 国鉄バス「北海道女子短大前」停留所に午前8時までに集合

〈ウトナイ湖探鳥会〉

- ◇とき 昭和53年6月11日(日)
- ◇集合 国鉄千歳線「植苗駅」前に午前9時までに集合

〈石狩川畔(札幌市福移)探鳥会〉

- ◇とき 昭和53年7月2日(日)
- ◇集合 札幌市営バス札幌線「福移入口」停留所に午前8時までに集合

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

探鳥会には、昼食、観察用具、雨具等を持参してください。いずれも午後2時~3時ころまでに終了し、現地で解散する予定です。雨天のときは中止します。

〈連絡先〉 札幌市中央区北4西5(林業会館)
北海道国土緑化推進委員会内
北海道野鳥愛護会 電話 261-9022

野幌森林公園を歩きましょう

上記の探鳥会のほか野幌森林公園で次のように探鳥散歩を行いますからご参加下さい。

- ・月 日 4月16日、5月21日、6月18日、7月9日
- ・集 合 午前8時、国鉄バス「北海道女子短大前」停留所。バス時刻の改正等で集合時刻を変更することがあります。参加される場合は前日までに連絡してください。
- ・昼食、雨具、筆記用具などお持ちください。
- ・雨天のときは中止します。
- ・連絡先 羽田恭子(電 611-0063)
柳沢信雄(電 851-6364)

んのスズメやカラスの話も楽しいし、間近に実物を見ながらベテランの解説を聞く、初心者や子供達には格好の「野鳥教室」になっているようです。

これからは屋内探鳥会に加えて藤野マナスル登山による野外探鳥、動物の足跡の観察、野鳥スライド大会など色々工夫をこらし、野鳥ファンの底辺を拡げるような探鳥会にしたいものだと思っています。

追記：大雪のせいか皆さん早目に引き上げました。最後まで残った人達と国道に向う途中、小学校近くの道路わきでイスカの群れにぶつかりました。オス・メスの混成群でベニヒワも数羽混じっていました。"残物に福あり？"とはこのことでしょうか。

〔とき〕 53年1月29日(日) 10:00~14:00 晴

〔担当幹事〕 小沢広記

〔観察された鳥〕 スズメ アカゲラ オオアカゲラ ヤマガラ ハシブトガラ シジュウカラ セグロセキレイ カケス ヒヨドリ ベニヒワ イスカ シメ

(合計12種類)

〔参加者〕 小堀煌治 三木昇 柳沢千代子 野々村菊 米山露子 藤谷昭典・雅貴・明美 山本康子 福士勝久 早瀬広司・富 吉田五市 亀屋紋十郎 野村梧郎 村野紀雄・森・原 川辺正由 梅木賢俊 萩千賀 猿子正彦 木村美津子・あけみ 美馬早智子 小沢広記



新年懇談会

1月28日14.00~16.30
札幌市中央区北1西7婦人文化会館にて、年頭恒例の懇談会が行われました。この日あいにくの吹

雪模様と降雪のため参加者は前年の7割どまりとなり残念なことでした。

しかし、スライド、8ミリ映写は大変内容の濃いもので、井上副会長のあいさつのあと柳沢、新宮、小川、萩会員持参のスライドは、道東の探鳥ツアー、庭に小鳥を、東南アジアの鳥々、イギリスの水鳥など、興味ある鳥影が紹介され、解説のなかに相互のやりと

りがなごやかに行われました。また、8ミリでは佐々木会員の張碓のアオバトの群(70~80羽生息)の様子、オオヨシキリの営巣ふ化がダメになったこと、つづいて萩会員による年末年始にかけてのホットなイギリスの水禽研究所の水鳥のかずかずの紹介、そして昨秋の珍鳥ソデグロヅルの採餌の様子(これは将来の貴重な記録となるでしょう)が映写されて、新年の交流の輪が深められました。

〔参加者〕小沢広記 小野寺敬子 新宮康生 深村康雄 井上元則 柳沢信雄・千代子 亀尾紋十郎 野村梧郎 谷ロー芳 早瀬広司 岡田幹夫 羽田恭子 村野紀雄 萩千賀 野口正男 梅木賢俊 佐々木勇 新妻博 土屋文男 小川巖(順不同)

(谷口企画幹事)

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

野鳥たちの往来が激しくなってきました。皆様お元気でしょうか。本号は広野さん山田さんの原稿を中心にして出来あがりしましたが、昨年から始めた全道の野鳥分布調査の解説にスペースをとり、その分だけ他の寄稿分が次号にまわりました。分布調査は会員の皆さんに少々負担をおかけすることになりますが、本会の盛り上りと多くの方々への啓蒙に大きな力を発揮するにちがいありませんので是非ご協力をお願いいたします。

また、お願いしていただいている原稿は次号以降に成るべく早く掲載する予定ですのでご了解ください。

さて、昨年12月に編集体制の変動があり、これまで編集業務を統括してきた森幹事が転勤のため辞任し、新たに白沢、三木、村野が加わって幹事の新構成は下記のとおりとなりました。それも本号をもって任期が終ることになりますが、一応本号及び53年度発行予定

分の各号について編集責任幹事を決めておきました。本号の編集・レイアウトの責任は三木が負いますが次号は白沢があたることになっております。編集会議はたいがい柳沢代表幹事も入ってひと月に1回ほどの割合で緑化推進委員会事務室で夜行われています。会議では、各地に生れている野鳥の会との結びつきをもっと深めたらよいのではないかと、地方の会員の動静をとりあげたらよいとか、あるいはこれからの編集内容を野鳥を中心としながら他の動植物の動きまで幅を広げるべきだという意見もでてきます。

何はともあれ、本会は真の野鳥愛護団体として発展すべきで、本誌も会員の皆さんが気楽に参加できて、楽しくしかも自然保護の心を貫く内容を維持してゆきたいと思っております。皆さんの積極的な発言、寄稿を期待しております。

〈編集幹事構成〉 飯山五玖子 梅木賢俊 小川 巖 小堀煌治 白沢昌彦 村野紀雄(統括) 藤巻裕蔵 三木 昇 (三木・村野記)